2022 年 10 月
1171 号

万葉

Manyoh

一冊の会 編集部
〒160-0015 東京都新宿区大京町５
（一冊の会研究室）

書き言葉と話し言葉の世界をつなぐ

～ 一冊の会 59 年目のスタート ～

10 月 27 日は一冊の会 59 年目のスタートの日です。早速 30 日に ZOOM での櫻華塾を開催しました。まず最初に小山副会長から新体制の説明がありました。一冊の会は NPO 法人ですので、NPO 法に従っておりますが、理事制を取ると通常「会長」というものはいわば名誉職のようなものになります。大槻会長は引き続き「会長」として活躍をしていただきます。従って「理事長」という職務は無くなり石田理事長は副会長となり、引き続き大槻会長を全面的にサポートしていただきます。小山副会長は、引き続き副会長として、そして事務局を束ねる立場として事務局長を兼任されます。馬居先生は筆頭理事になります。「改めて、新しい時代の幕開けのスタートになったかと思いますので、力を合わせて来年の 60 周年、その前の FAWA 大成功に向けて一致団結していきましょう！よろしくお願いします」と小山副会長が宣言し、59 年目になって初の櫻華塾はスタートしました。

■大槻会長から

一冊の会は国連の歩みと共にあります。10 月 1 日の「国際高齢者デー」にあたり、アントニオ・グテーレス国連事務総長が発されたメッセージを抜粋してお伝えします。「2030 年までに、14 億の人々が 60 歳以上になります。社会、そして国際社会としての私たちの責務は、長寿に伴う課題に対処し、その潜在能力を引き出すことです。私たちは、あらゆる年齢のあらゆる人々の社会的、経済的、政治的包摂性を推進しなければなりません。この約束は、持続可能な開発目標（SDGs）にも謳われています。生涯学習、強力な社会的保護、アクセス可能な質の高い長期的なヘルスケア、デジタル格差の解消、世代間の支援、尊厳と敬意が不可欠です。高齢者は、膨大な知識と経験の源です。私たちは、高齢者たちの積極的な関与、完全な参加、重要な貢献を確保するよう努めなければなりません。高齢者自身が大変な力を持っており、それを発揮していかなければならないのです。」一冊の会は常に生涯学習を推進し、草の根で社会に働きかけてきました。今までやってきたこと、自分自身に自信を持ち、何歳であっても「年だから」などと言わず、今後も素晴らしい社会を築くために活動していきましょう。

■馬居先生のお話

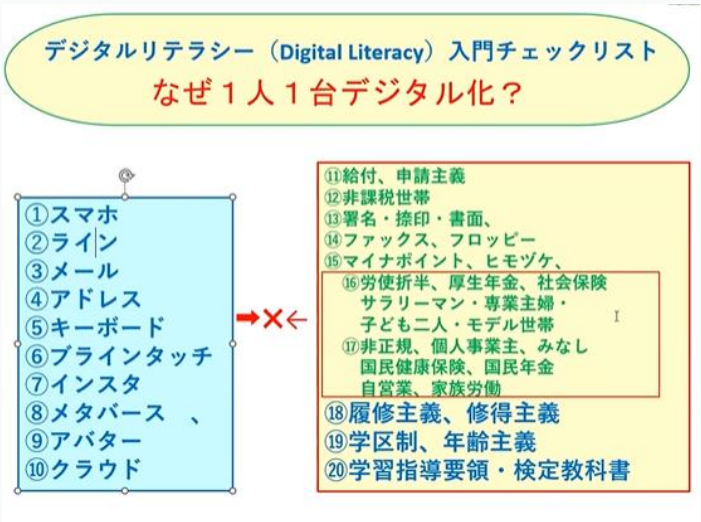
静岡大学名誉教授であり長くに亘り一冊の会の活動を支援して下さっていらっしゃいます馬居先生に、8 月の櫻華塾で、全国の小中学校で 1 人 1 台の端末（タブレット・PC）が配布（貸与）されたことに関して、お話いただきました。今回、その続きをうかがうことができましたので、要旨をお伝えいたします。

アジアにおいて日本はトップを走っていた時、欧米が素早く上手く変えられなかったもの、例えばタイプライダーからコンピュータへの変化といったものを、日本は変えました。遅れた国は進んだ国を参考にし、いわば「踏み台」にします。日本は今、踏み台にされる側なっています。デジタル化というのは、それが出来る人だけ変ればいいというものではありません。どんなに辛くても、これから育ってくる子供達が暮らすこの社会

を変えないと日本の未来は暗いものとなるでしょう。私達高齢者が、戦争で負けたこの国を作ってきた世代が、いまもう一度新しいこの国を作るための現場のリーダーにならないといけません。国のリーダーや社会のリーダーは若い人に任せて、「現場」のリーダーです。大槻会長の言葉で言うと「生涯学習」をし、スキルを上げてあげていかないといけません。

今日お伝えしたいのは、何故「1 人 1 台」なのかということです。タブレットは端末ではありません。端末というのは指令を出すところがあって、それを受ける道具のことです。PC やタブレットというのは受ける道具ではなく表現する道具です。学校では今までも PC を使う、あるいは PC を使って学ぶ練習はやってきた。今回それがタブレットになり、表現媒体になる。SNS というものは、情報の受け手ではなくて出し手にならなくてはなりません。日本国全体が PC を通して情報が流れる社会になった時になにが起こるか、それを私達はコロナ渦で経験し、失敗も経験した。様々な申請が、日本では大変時間がかかりました。

さて、ここでチェックリストをつくってみました。①から⑩は全て「道具」です。皆さん、いくつ知っていますか？いくつ使っていますか？



私は、今年初めてラインをやりました。ラインは短文でのやり取りが主流です。私が電話で指示をしたことを学生がラインで回したということがあり、途中で入ってきた人が文脈を理解できず、結論だけを見た人は私が言うことを理解できません。ラインを学生が使っている以上必要ですので、私が言ったことをそのまま文字にしてラインに載せたところ、ペーパーのように広げなくても読め、学生は繰り返し見ることができました。機器を上手く使いながら、上の世代が培ってきた物を文字で伝えていく必要があります。ここで問題となるのが、日本語は口語と書き言葉が違うことです。口語でしゃべる人達の世界にいると、私のような書き言葉の世界にいる人間がしゃべることが分かりにくい。逆もそうです。全部書き言葉の世界に生きてきた人は、現実の社会で何がおこっているか分からない。日常の話し言葉で生きている人達の思いや心情を書き言葉で伝える人が必要です、それを大槻会長はやられてきました。この会は両方の世界に属する人がいますね、2 つの世界をつないでいく必要があります。

メタバース、アバターは新しい産業です。メタバースで都市を作り店を作り商品を並べるのです。アバターは、例えば僕が若い女性になることもできれば年配のおばさんになることもできる。今までできなかった事ができる時、新しく大きな資本の場が産まれます。一冊の会に、それができる人がぜひ欲しい。一冊の会がどういうことをやっているかということを世界の人たちに知ってもらう、あるいは世界の人に参加してもらう時に使える道具だと思います。

最後のクラウドですが、学校はクラウドを利用し教室ごとに違う「部屋」を持ち、他の子達が入れないように、あるいは入る時に鍵が必要なようにしています。

今後、子供の成長発達の時に常にＰＣがあるようになります。言い換えれば、ご飯を食べたり礼儀を身につけたりというその中に PC が入ってくる。ひいては、その子供の親、家庭がＰＣを使える家庭に変るということです。日本の学校は戦前も戦後も、学校からこの国を変えるという役割をもっている。

子供がタブレットの使い方が分からず、親世代も忙しくて教えてあげられなければ、動画視聴など子どもは好きに使うだけでしょう。その時に祖父母が助言できるようにならないといけない。団塊世代を支えるため、親世代は働かなければなりません。そのためには、祖父母が孫世代のスマホやタブレットの使い方をみてあげなければ、宿題をみてあげられなければなりません。社会の仕組みを維持するためにです。日本国民全体のデジタル化、そこまでやれるなら１台５万円のタブレットも惜しくはありません。生涯学習というのは教室などに行き楽しく学ぶとか、そういうことだけではない。生きていくための学びが必要で、それは私が言う「Re-skilling」です。

さて、では学校の先生は「1 人 1 台」をどう感じてどう活用しているのか。何ができるか、必要と思うか、実際に行っているかを質問してみました。結果、「できること」と「必要だと思うこと」に差がありました。

1）本調査での問いの構造の再確認を

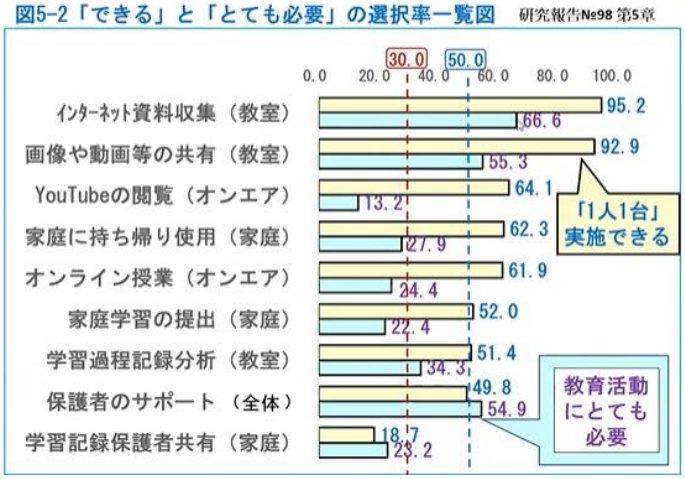
Q5
★この春より、小学生に「1人1台」、パソコンやタブレットなどの端末機器が配布されています。
★その端末では A～Ⅰのようなことは、先生の所属の学校で現在実施できますか。

Q5－1

A	児童一人一人の学習過程の記録の分析	1．できる	2．できない
B	児童の学習過程の記録を保護者と共有	1．できる	2．できない
C	YouTube の閲覧	1．できる	2．できない
D	インターネット等による資料の収集	1．できる	2．できない
E	画像や動画等の共有	1．できる	2．できない
F	端末を家庭に持ち帰っての使用	1．できる	2．できない
G	端末による家庭学習の提出	1．できる	2．できない
H	使用にあたっての保護者のサポート	1．できる	2．できない
I	端末を使用したオンライン授業	1．できる	2．できない

Q5－2
またそれは、小学校の教育活動に必要だと思いますか。
それぞれに、あてはまる番号1つに○をつけてください
★選択の尺度は「とても必要」「やや必要」「あまり必要でない」「まったく必要でない」の４種

図5-2「できる」と「とても必要」の選択率一覧図 研究報告№98 第5章



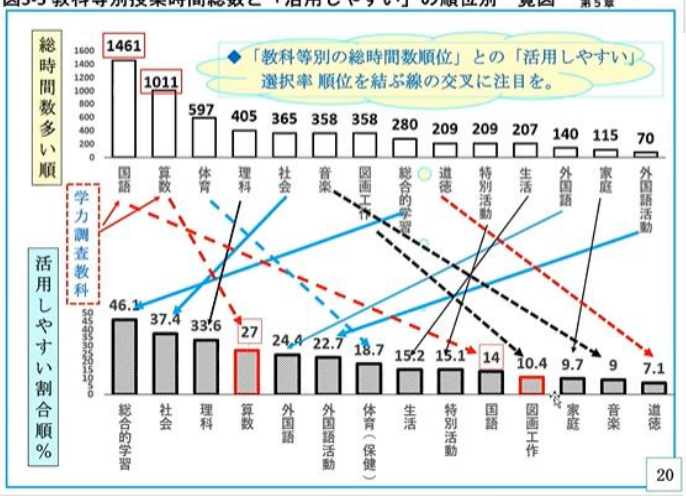
質問では「やや必要」という項目もあり、この選択肢を入れるとある程度の人が「必要」寄りに回答しますが、先生へ質問したデータを見るとときに「やや」と答えた人数は外して考えた方がいいです。

ほとんどの項目において「できる」が「必要だと思う」を上回りました。一番差が大きいのは「YouTube の閲覧」です、できるが必要ではないと先生方は考えている。家庭に持ち帰り使用すること、オンライン授業をすることも、できるけれども必要でないと考えていると読み取れます。学習過程記録分析という、一番コンピュータを使うと有益だと思われる事は、できると答えた先生が半分、必要と答えた先生は 3 分の一です。一方、保護者のサポートは必要と答えた割合よりもできるという答えの方が少なかった。この結果を言い換えると　親に手伝って欲しいが全てを任せるつもりはないということ。親に評価される事を教員は一番嫌う。学習過程の記録分析は必ずできるように作ってあるはずなのに、それをできないようにしたのはおそらく教育委員会、あるいは校長会ではないか。

次に、教科毎の授業時間数をみてみますと、日本の学校教育は国語と算数が中心です。次に体育が多い。日本の学校教育がどこに力を入れているかということがよく分かります。

１・２年生の教科から理科社会が無くなり生活科が創設された最初の年の子供は、今は 30 代後半になっています。3・4 年生の外国語活動は、外国語とは違い教科書はありません。「活動」とつくと教科書は無いんです。総合的な学習も教科書はないですね。特別活動は学芸会とか卒業式、修学旅行等を指します。

図5-5 教科等別授業時間総数と「活用しやすい」の順位別一覧図 研究報告№98 第５章



20

3）14種の教科等のパワーバランスと小学校教員の判断基順

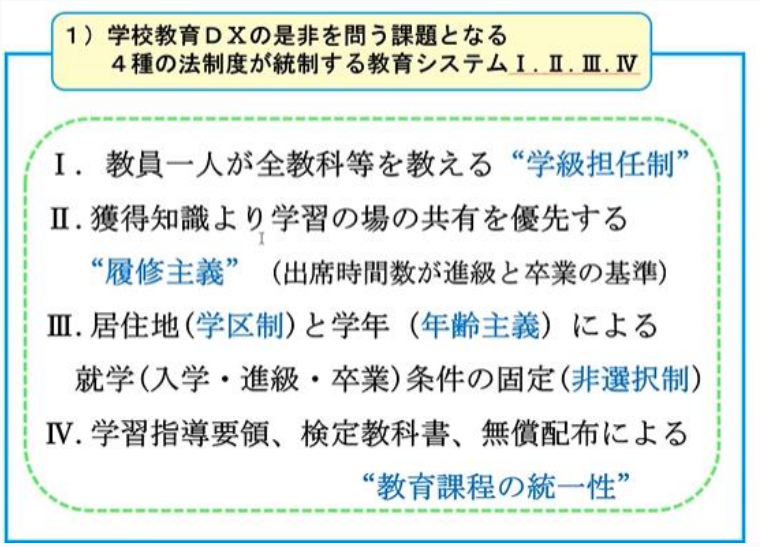
研究報告No.98 第５章　**表5-3 小学校の各教科等に配分された学年別事業時間数**

区分		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	計	順位
各教科の授業時数	国語	306	315	245	245	175	175	1461	1
	社会			70	90	100	105	365	5
	算数	136	175	175	175	175	175	1011	2
	理科			90	105	105	105	405	4
	生活	102	105					207	11
	音楽	68	70	60	60	50	50	358	6
	図画工作	68	70	60	60	50	50	358	6
	家庭					60	55	115	13
	体育	102	105	105	105	90	90	597	3
	外国語					70	70	140	12
特別の教科である道徳の授業時数		34	35	35	35	35	35	209	9
外国語活動の授業時数				35	35			70	14
総合的な学習の時間の授業時数				70	70	70	70	280	8
特別活動の授業時数		34	35	35	35	35	35	209	9
計		850	910	980	1015	1015	1010	5780	

18

各教科毎に「活用しやすいか」を聞き、それを時間数とを比較したものが図 5－5(左図)です。総合的な学習が一番「活用しやすい」と回答している先生の割合が多いですが、全体の授業時間数の割合は小さい。

一番授業時間数が多い国語で使いにくいと言うことは、PC を使うということが限られてくる。PC は、改めて言いますが道具ではなく表現そのものです。紙と鉛筆と同じです。



最後に、日本の学校制度の特色を４つお伝えして今日は終わります。学級担任制ということは、先生は子供を選べないし、子供も先生を選べません。日本の学校は落第がなく、出席時間数が進級と卒業の基準です。何を学んだかではない。反対は修得主義で、何を学んだかを問います。例えばアメリカでは教科毎に行く学年が違います。学区も選べません。年齢も選べません。教科書も検定で統一されている。先生も子供も親も、誰も選ぶことができない。選ぶことができない人を育てるのが学校なのです。

来る人を拒めないし、差別してはいけない。結果、人に迷惑をかけないことが良しとされる、例えばどんな災害があっても並ぶような国民性になる。これは、同じ仲間の中で生きていく分には上手くいきますが、特別な能力や全く違う人がくると排除せざるを得なくなる。世界で適応する能力が育たない、これらが PC を使うことの大きな壁になっている。日本が短期間で世界のトップの国になれたのはこれらの力のおかげですが、今は邪魔をしているので全部組み替えないといけない。壮大な実験が今始まっていると言えます。

一冊の会は、年齢も自由ですし、この 4 つの特色には全く当てはまっていませんよね。そのような団体は伸びます。今日、お話した事を学校の現場はまだ気付いていません。最先端のことをお伝えしたので混乱しているかもしれませんが、一冊の会の活動を益々伸ばしていきましょう。

■小山副会長から

今年の 6 月、国連はメディアの力を通じて気候変動対策のアクションを呼び掛けるキャンペーン「1.5℃の約束－いますぐ動こう、気温上昇を止めるために。」を発表しています。SDGs の理念に沿い、持続可能な世界を残すためにも、ご自身の生活の中でもちょっとずつ努力していきましょう。

今回は、遠くカンボジアから山内事務局次長が ZOOM をサポートしてくれました。このように離れていても実際に協力しあえることは IT が進んだ恩恵です。しかし、本日の講義を聴き、アバターやメタバースの活用などとても考えておりませんでしたので、ZOOM や SNS ができるからと立ち止まってはいけないことを学びました。また、今の小学生がどんな教科をどのくらい学んでいるか分かっていませんでした。生活科は何となく聞いたことはありましたが、その分低学年で理科と社会という教科が無い事を知りませんでした。自身に子供がいるにも関わらず、これから子供が入り学ぶ場所である小学校に対する知識が低く、自分事にならないと調べたりしないものだと反省しました。前回先生が「子育てしている家庭とそうでない家庭が分断されています」と話されましたが、このままではますますそうなってしまいます。生涯学び続けないといけないことを痛感いたしました。引き続き、学びを止めずに進んで参りましょう。

文責：赤田主任研究員

※掲載記事、写真等の無断転載及び複写を禁止します。Copyright(C)2020 Issatsu no Kai. All Rights Reserved.